

幻住派密参録について

——『青鷹集』を中心にして——

飯塚大 展

問題の所在

幻住派は、室町時代後期から江戸時代初頭にかけて、大きく展開した臨済宗の一派である。幻住派は、その法系の二重性において極めて特異なあり方を呈するが、逆にその法系の二重性を梃子に、混乱し、変容を余儀なくされた五山派の中に深く浸透していったと考えられる。五山派の中における、幻住派の展開過程については、その法系の二重性の意味も含めて、玉村竹二氏の諸論考があり、本稿もほぼその業績に依拠するものである。

本稿では、幻住派のもう一つの特徴である密参録について、主に『青鷹集』を素材として考察してみたい。幻住派の人々は、積極的な諸師遍参志向を有していたと考えられる。勿論幻住派のみが遍参遊方していたわけではない。しかしながら、例えば、大拙祖能の法嗣白崖宝生の諸師への参学は、

伝記およびその語録によって知ることが出来るが、五山・林下を問わず、曹洞・臨済の枠組みを越えて参学しているのである。禅籍抄物を考える上でも、幻住派の活動は注目に値する。今回は扱い得ないが、一方で林下大徳寺派・妙心寺派の密参録や曹洞宗道元派下の本参を総合する形で、独自の公案体系を有するに至ったが、五山の種々の講義録である抄物についても積極的に蒐集していたのではないかと考えている。

幻住派の展開

幻住派とは、天目山の中峰明本より出た一派の総称であり、遠溪祖雄・復菴宗己・無隠元晦・古先印元の各派を含むが、本稿では、京・鎌倉の五山に浸透し、特に室町時代後期より江戸時代初頭において盛んであった遠溪祖雄を祖とする一派を幻住派と呼称する。

遠溪祖雄は、丹波の人、弘安九年（二二八六）に生まれ、

十九歳にして出家し、後に天目山の幻住庵で中峰の印可を得た。帰国後は、正中二年（一三三五）丹波に瑞巖山高源寺を開き、康永三年（一三四四）六月二十七日に寂した。以後、了庵玄悟―玉圃玄琛―高陽宝瑱―大冉宝碩―運籌碩勝―玄室碩圭―一華碩由と次第するが、一華以前の幻住派の活動は判然としない。

一華は、文安四年（一四四七）三月四日に、筑前筥崎の秦氏の家に生まれた。菩提寺である建徳寺に入り、住持梅隱について出家した。梅隱は、蘭溪道隆の四世孫に当たり、一華も大覚派に属することになる。文明四年遍参遊方の途につき、林下大徳寺派養叟宗頤の参徒であつた宗良居士に参じ、ついで曹洞宗実峰良秀派下の大徹道玄に参じた。そして最後に覚晶庵主玄室碩圭に参じ、「三関」を透り、文明十三年（一四八二）仏涅槃の日玄室の印可を受け、密符を受けた。永正四年（一五〇七）三月八日、一華は六十四歳で寂するが、諸録中より古則一千余を集め、初関・両関・三関の三部に分類配列した。幻住派における密参録の成立を見たわけであるが、一方で幻住派の伝法の証とされる血脈・大事・宗派図などは、一華が曹洞宗のものを参酌して創出したものとされる。これらの点については、『浮木集』（駒沢大学図書館蔵）が参考になる。以後の展開については、省略せざるを得ないが、大内義隆の命により遣明正使となつた湖心碩鼎、毛利元就の帰依を受

けて洞春寺開山となつた嘯岳鼎虎、その弟子で吉川元長の篤い信仰を得た済蔭玄宏などを経て、中国地方に確固とした基盤を築き、その外護の下、五山派としての地位も確保するに至る。京都五山においては、天竜寺を始め、建仁寺においては、乾龍慧竺、永甫英雄、相国寺においては、西笑承兌、その他圓光寺の閑室元佑、玉質宗樸等、有数の尊宿たちが受法するに及び、元龜・天正年間には、幻住派は隆盛を迎えることになる。

さて、関東の叢林に幻住派が浸透する端緒となつたのは、三伯玄伊、岫雲玄端が円覚寺との関係を持ったことによる。三伯玄伊は、野州（栃木県）喜連川出身、天甫碩円とは俗の兄弟に当たり、古河の永仙院の徒で、円覚寺の伽藍復興に寄与した人である。岫雲玄端は、天甫の弟子である。足利学校の歴代の庠主で、幻住派の法系につらなる者は、九世閑室元佑、十世龍派禅珠、明徹祖徳、沢雲祖兌等がいる。

『青鷹集』について

本書は、足利学校遺跡図書館に蔵されている江戸時代初期書写と推定される密参録であるが、原表紙に「青鷹集坤」とあり、乾冊を欠く零本である。本書については、拙稿「足利学校遺跡図書館蔵の禅籍について」（『禅文化研究所紀要』二一〇号）において若干言及したが、未だ不十分な点が多い。玉村

竹二氏は、本密参録を曹洞家の僧が臨済宗各派を遍参して得たものとされたが、金田弘氏は、疑念を呈されている。今の所確証はないが、私見としては幻住派の僧によってまとめられたものと考えたい。

(一) 別峰相見、準、教中ノ妙法、孤頂ノ徳雲比丘、從來不下山、善才去参、七夕不逢、一日却在別峰相見、乃呼見了、却与他説、一会三世一切諸仏、智慧光明、普光法門、圓悟云、徳山既不下山、図什麼、却在別峰相見、若道住下山、教中説、徳雲比丘不曾下山、在妙峰孤頂、到這裏、徳雲与善才、的々在那裏、弁、仏見法見、尽果タ端のカ、相見シヤ、下、十州春尽花凋残、珊瑚樹林日果々、又、白雲尽処是青山、知音更在青山外、異同、十洲——果々ノ句ナシ、或弁、善才七日迄ニスレトモ、徳雲ニ不逢、故ニ、身瘦心倦テ、従前五十三人ノ善知識ニ逢テ、久得底、悟得底ヲモ、忘ハテ、百不知百不会ノ境界ニ到時カ、即別峰相見シヤ、下、白雲——青山、又、曲終人不見、江上數峰青、又、一剣依天寒、

△関山四派

景川云、仏見法見、皆ニ成テ果タ境界シヤ、下、白雲尽処是青山、悟溪云、仏心法心共ニ、忘シタ処カ、相見シヤ、下、日月蓋覆不昼、特芳云、仏見法見皆無境界シヤ、曲終——青、東陽云、三世諸仏、歴代列祖、出須弥頂上、百不知百不会処テ、知り得カ、相見シヤ、下、十洲——果

本書は、大徳寺派及び妙心寺派の密参録の両方の特徴を有

幻住派密参録について(飯塚)

している。即ち大徳寺派で言う「下語」「弁」は、妙心寺派で言う「一句」「平話」に当たるが、その用語が共に用いられていることによっても分かる。又上記のように、「関山四派」の解釈が記されているほかに、大徳寺派の「大燈」「徹翁」「二休」の解釈や「洞宗(曹洞宗)」の解釈が並挙されている点も本書の一つの特徴である。

まとめ

私は、中世における林下、即ち大応派下の徹翁派・関山派・遠山派の三派、曹洞宗道元派下の諸派の禅の特徴は、公案禅、就中その密参口訣的側面にあると考える。幻住派は、五山の中に浸透して行く際には、その林下の特徴である密参口訣を積極的に取り入れ、独自の公案体系を有していることが一つの利点となつたと思われる。五山派の法を嗣ぎながら、又同時に幻住派の嗣法も兼ねると言うあり方は、室町時代末から江戸時代初頭にかけての禅宗史を考える上で注目すべき点であると思う。幻住派の密参録を考察することにより、幻住派の公案体系、及びその解釈の特徴を明めたいと考えている。

〈キーワード〉 幻住派、『青鷹集』、足利学校

(駒沢大学大学院)